

林
新發明
速記大日本字
全

ホ 2
907



門 加²
907
巻

速記大日本字會之主兼幹事林雍臣著

林雍臣
一新發明 速記大日本字

明治廿年八月
版權免許 速記大日本字の舎蔵版

速記大日本字

凡例

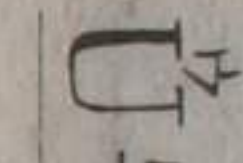




本書速記大日本字の字體「△」「|」「(」」「○」の○
の形も全く羅馬字と相同しく「△」「(」」「○」の如き
も亦能く似かよひてゐ、有れど固まり口の開合と
舌唇の作用との貌を象どり表し且數字を指を屈
むる象どりたるより更に羅馬字は據れるより
非ざるごとく本文第一章に説示せるを觀てさとり
明らむべし蓋聞くは羅馬字も圓形○の畫内より方
形及十字形と交叉形とを畫きたる

○速記大日本字 凡例



を元畫と



して文字をつくり出だせりしなり。と言ひ或は、い
 る。かの「」の如きも、牛の角の貌を象とれるよ
 て、其の鳴く聲「ウー」と聞ゆるは據りて、「う」音の記標
 とせしなり」とされむ。かの「」は、
 は基き、」は、
 るべし。又數字の如きも、全く  畫中  は基き
 て、つくり出だせりし事、いちぢるし。

明治二十年一月八日

著者 識

速記大日本字

目次

總論

- 第一章 字體の本因及成立
- 第二章 綴字法及變調符號
- 第三章 數字の成立及用法
- 第四章 書體及運筆法
- 第五章 漢語綴字法
- 第六章 指示辭結尾辭接續辭及感詞
- 第七章 速記大日本字と羅馬字との比較

○速記大日本字

○東巴大日本字考

并は縦書きと横書きとの辨

第八章 加點畧字躰の綴字法及運筆法の

例文

第九章 畧點走筆躰の綴字法及運筆法の

例文

林 甕 臣 著
一新發明 速記大日本字

林 甕 臣 著

總論

我々國の文明日よ其の歩を進め、外交の關係、月よ其の繁密に至る。今や、世界の情況、まさよ優勝劣敗、風潮の向ふ處、前途如何よ成り行くべきや。眼を押拭ひて見よ。國の行方を思むる有るべからざるも、實よ今日之急務とも。社會愈進化し、其の爲すべきの事業、益多きを加へざるべからざるも、自然の勢なり。されむ

其の處をべきの方法、從て時を減じ、勞を省き、其の敏速なるを要し、其の簡便なるを欲するも、文明諸國一般の通規たり。さるるを文運開進の至要至切なる文章より多畫錯雜のみならず、數千百萬の多きを暗記するも非ざれむ、用を辨じ能わざるが如き、不便不利なる漢字を用ふるも、經濟上の原理よりさへ背き、前途國を維持をべき學生をして、貴重の歲月を無要に費やさしめん事、國の爲實に歎くも、尚餘り有りと謂ふべし。我が大日本帝國の將來、漢字地を拂ふも非ざる限りも、學術をもて、歐米諸國と對峙せん事、幾千年の後

を期するも、到底思ひぬ事なり。かの假名の會、羅馬字會の如きも、皆此の趣旨をもて起れるも、率ソ甕臣らと感を同うする者と雖ども、羅馬字の如きも、日本語に假用せんも綴字法二字若く三字を横に雙べて、組合せざるを得ざる字體なれむ、一音の記標に充つるも、二字若く三字を要するをもて、一詞一句の上にも、書連ねたる字面シヅラ自然長きも失し、讀むも不便を感じ、記を小手數を要し、又紙面を費やを事、甚多し。假名も、一音の記標なれば一字にて足るをもて、讀むも便を與へ、記を小手數を省き、紙面をも亦費やを事、

勘けれを、遠く羅馬字に優れらるゝ似たれども、運筆尚
横書きの至便なる小至ても、假名も其の速力、却て羅
馬字に及び難き事、實驗上論を待たざりて、人既に知
る所なり。蓋し假名も羅馬字も漢字に比較するるときは、
遙かに優りたるべきも、其の一長一短有るを免かれ
ざりて、究極完全の物と謂ふを得ざれむ、之をもて、文
明學事上の至要至切なる利器とす。今日に使用を
る小足るべき物とも、思はれど、中よ就て從來日本字
として用ひ來たりつれど、假名の如きも、片假名平假
名共に元來支那の文字を畧製して假用せらるものよ

過ぎざれむ、之をもて兼諾りて、本邦固有の文字と稱
せらるを得む。嗚呼、他の器具事物を、兎も角も、學事
上至要至切なる文章と相須つべき貴重の文字まで、
舶來品をもて、假用せん事、頗獨立國の體面に關し、
皇統一系なる國體にも、耻づべきの至りなれむ、和魂
憂國の士よ、誰か、之を遺憾とせざる者有るべき。
余本邦固有の文字無きを慨む、年久しきより依り、多年
非常の苦慮意匠に、聊思得たる處有りしを、數回の改
良を経、逐次に訂正を加へ、遂に今年一月本邦五十音
の記標及數量の記號として、粲然觀るべく實用に足

速記大日本字
るべき横書き至便の新字を發明せし事を得たり。抑
其の之を發明せし原由たるや、七八年來五十音の發
音法を正し定めんことを從事し、嘗て口の開合舌唇
の作用を研究せしものよ、偶然一朝の
造爲し出でしものよ非む。悉皆我々大日本帝國人の
聲音發象の原理は基き、口の開合と息氣運營と相須
つ舌唇の作用とよ依りて、象とれるなり。又數字の如
きも、左手の指を拇指より順に折屈むる貌は基き、其
は實理の自然し出でたる字體なれを、之をもて、本邦
五十音の記標及數量の記號として、日用に用ひんよ

道理上として、動かをべからざるを、論なく、之を便利
上より論究せらるも、字畫單簡として、實地は適切のふ
ならず、運筆速力の捷敏ならず、綴りなせる字面の冗長
ならぬ、曾他の字體は比類を見ざる處の至便至利の
速記字と謂むんも、蓋敢過言よと、非ざるべし。是即自
をこがまじきを打忘れ、此の文字を稱へて、速記大日
本字と名くる所以なり。光陰を惜しむ、實學を望み、前
途爲を有るべき志を抱ける學生を、必此の速記大日
本字を學びて、實地に用ひ、多畫錯雜なる漢字字形の
暗記と習字の練熟とよ貴重の歲月を無要に費やを

如き陋弊を断然去りて、顧みざるや、せまほきものよこそ。

此の字體の本因成立、綴字法及書體運筆法どもを序を逐ひて、簡明に指示さんとす。

第一章 字體の本因及成立

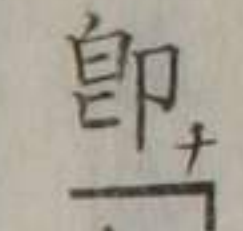
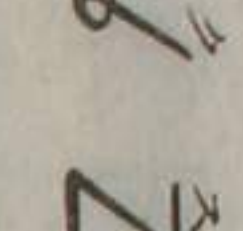

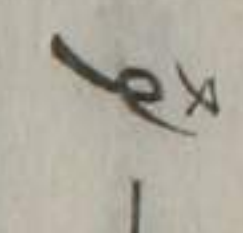
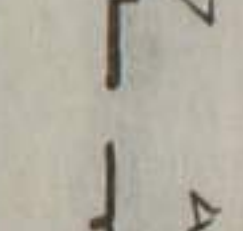
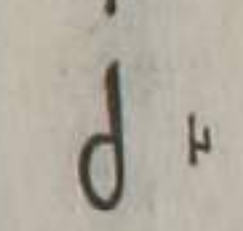
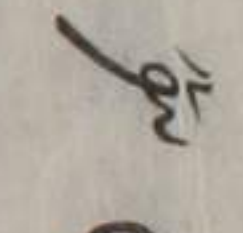
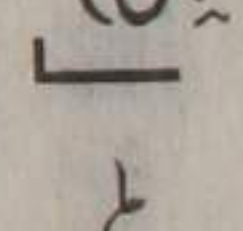
文字を畢竟聲音の記標に過ぎざる者なれば、此の速記大日本字も、五十音と相等しく、字數五十の他、出づるものあり事なし。故に音の記標に用ふる字をむ五十音字と名づく。然れども「あい」「えお」の五つの母字を除くの外、「かきくけこ」「さしをせそ」「たらつ


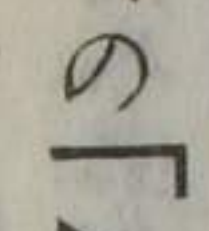
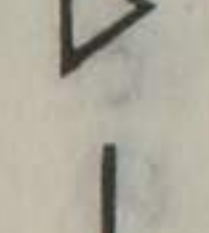

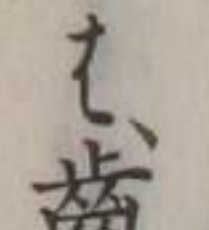
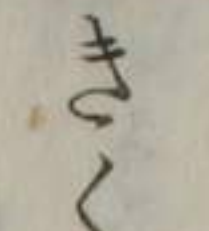

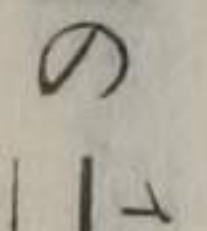
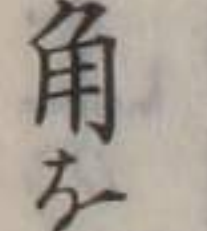
てど」「なにぬねの」「はひふへほ」「まみむめも」「やいゆ
えよ」「らりるれろ」「わろうゑを」の四十五字を、悉皆「あ
いうえお」の五つの母字とくわつぬふむゆるう」の九
つの父字との十四字をもて組合せたるなり。

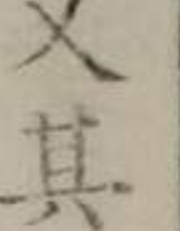
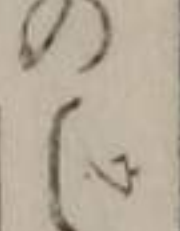
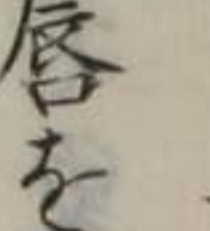
今此の條よ、字畫の本原たる父字及母字の成立を先説示さん、五十音中、其の母音たる「あい」「うえお」の五音の記標を、取りも直さず、其の音を發する口の開合の貌を象どりて、字體となせりたり。


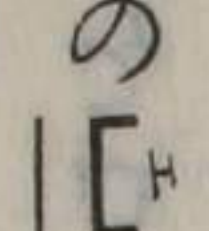


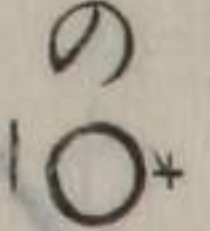
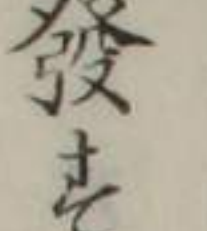
即ち「△」「ト」「〔」」「○」と書くが如し。

此の字も、子字を妊孕をべきをもて、母字と稱す。

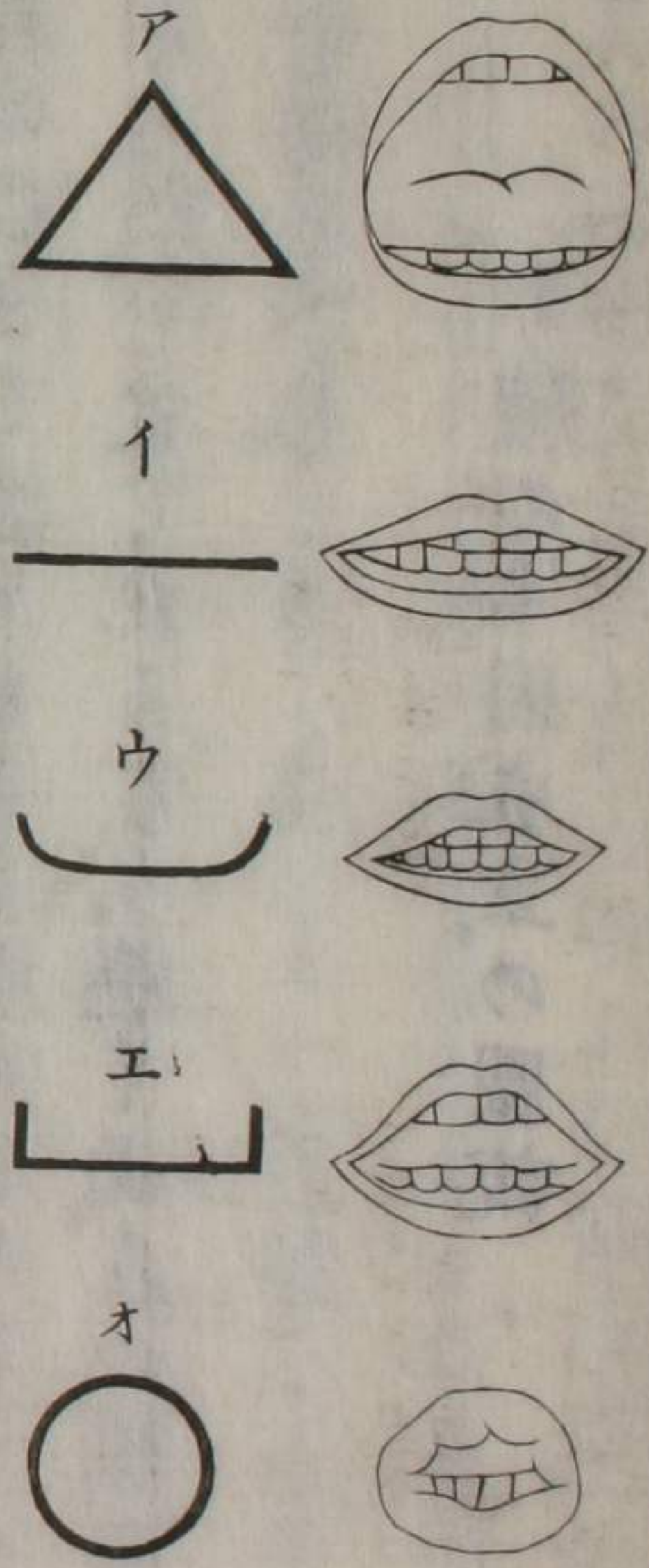
又其の父音たる「くをつぬふむゆるが」の九音の記
 標も取も直さを、其の音を發するよ、息氣運營と相須
 つ舌唇の作用を表し象どりて、字體ともなせらるなり。
 即「       」と書くが如し。
 此の字も、子字を生むる胤と成るべきをもて、父字と
 稱を。

扱其の「  」の「 」を放ち、口を大
 きく開きけりて、音を發する貌を象どれるなり。
 又其の「 」を放ち、口角を側へ拵きて、音を
 發する貌を象どれるなり。

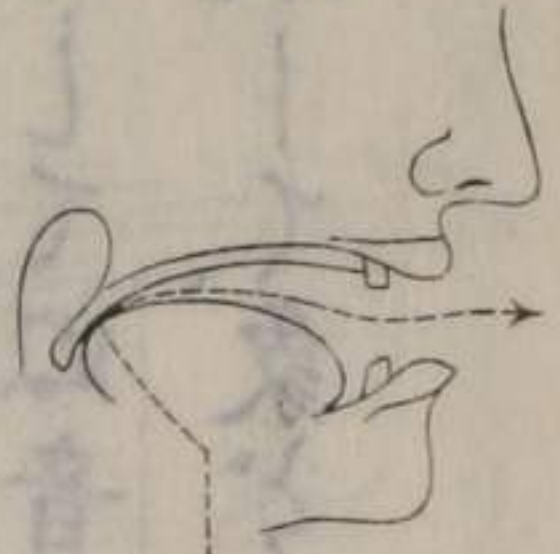
又其の「 」を放ち、口を自然形の儘なごら下
 唇を窄くする心用ひ、音を發する貌を象どれ
 るなり。

又其の「 」を放ち、口角をや、側へ拵き
 て、音を發する貌を象どれるなり。
 又其の「 」を放ち、口を窄くして、音を
 發する貌を象どれるなり。總て尚左の圖は引照らし
 て、會得をべし。

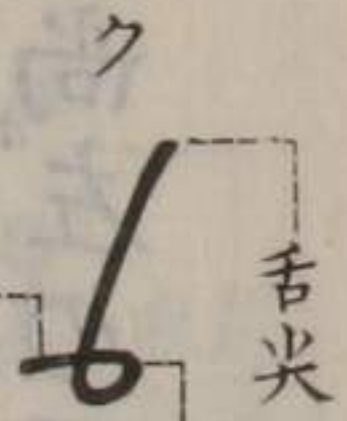
字體の本因成立の圖說



又其の「カキ」の「カ」を、舌基を口蓋の奥に打合をせて、息氣を其の間を弾き、音を發する息氣運營と相須つ舌の作用を表して象どれるなり。尚左の圖を見て、會得をべし。



舌基ヲ口蓋ノ奥ニ打合ハス

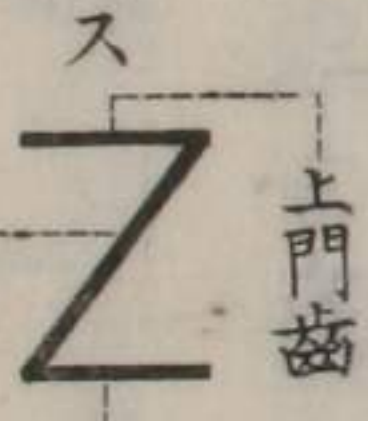


舌尖
舌基ヲ口蓋ノ奥ニ打合ハセテ息氣ヲソノ間ニハジク意味ヲ象ドル
口蓋ノ奥

又其の「カキ」の「キ」を、舌尖もて、息氣を上下の門齒に觸れしめて、音を發する息氣運營と相須つ舌及齒の作用を表して、象どれるなり。尚左の圖を見て、會得をべし。



舌尖ヲモテ息氣ヲ上下ノ門齒ニツレシム



上門齒
下門齒
舌尖ヲモテ息氣ヲ上下ノ門齒ニツレシムル意味ヲ象ドル

又其の「カキ」の「カ」を、舌背を口蓋に打合をせて、息氣を其の

間^ニ彈^キそつ音を發せら息氣運營と相須つ舌の作用を表し、象どれるなり。尚^ホ左の圖を見て、會得をべし。



舌背ヲ口蓋ニ打合ハス



舌背ヲ口蓋ニ打合ハセテ息氣ヲソノ間ニハジク意味ヲ象ドル

又其の^ハハ、舌尖を口蓋ニ打合ハせて、息氣を鼻孔へ洩らし、ぬ音を發せら息氣運營と相須つ舌の作用を表し、象どれるなり。尚^ホ左の圖を見て、會得をべし。



舌尖ヲ口蓋ニ打合ハセテ息氣ヲ鼻孔へ洩ラス



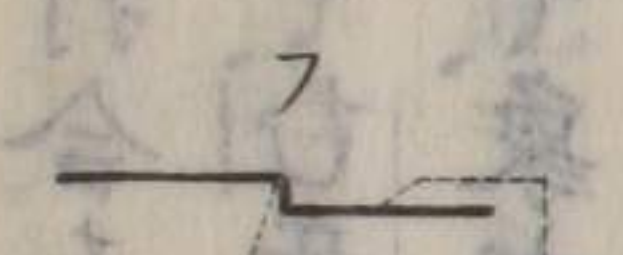
息氣ヲ鼻孔へ洩ラス意味ヲ表ス
舌基
舌尖ヲ口蓋ニ打合ハスル意味ヲ象ドル

又其の^ハハ、喉より息氣ヲ直チニ上下兩唇ノ間ニラレシム

又其の^ハハ、喉より息氣を直チニ上下兩唇の間ニ觸れしめて、ふ音を發せら息氣運營と相須つ唇の作用を表し、象どれるなり。尚^ホ左の圖を見て、會得をべし。

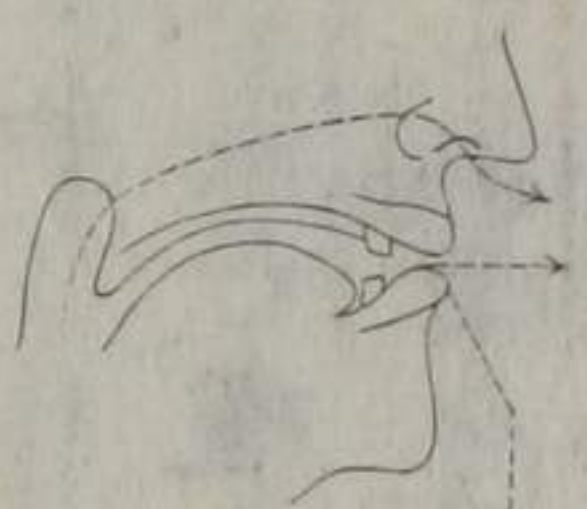


喉ヨリ息氣ヲ直チニ上下兩唇ノ間ニラレシム

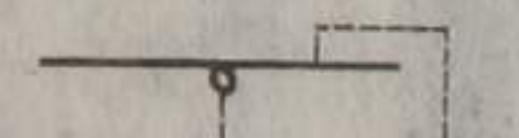


唇ヲ象ドル
息氣ノ上下兩唇ノ間ニフル、意味ヲ象ドル

又其の^トハ、上下兩唇を打合せ、息氣を其の間
 へ彈き、半鼻孔へ洩らし、む音を發せ、息氣運營
 と相須つ唇の作用を表し、象どれるなり。尚左の圖
 を見て、會得をべし。



上下兩唇ヲ打合
 セテ息氣ヲソノ間
 ニハジク



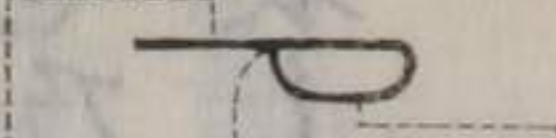
唇ヲ象ドル
 息氣ヲ上下兩唇ヲ打合ハスル
 間ニハジク意味ヲ象ドル

又其の^トハ、其の音質、お行のい音と^ウ音とを合せ
 せて、象づくりたるものなるを、口角を側へ拵き
 て下唇を窄く、心用ひ、息氣を觸れ、めて、乃

ゆ音を發せ、息氣運營と相須つ口の作用を表し、
 象どれるなり。尚左の圖を見て、會得をべし。

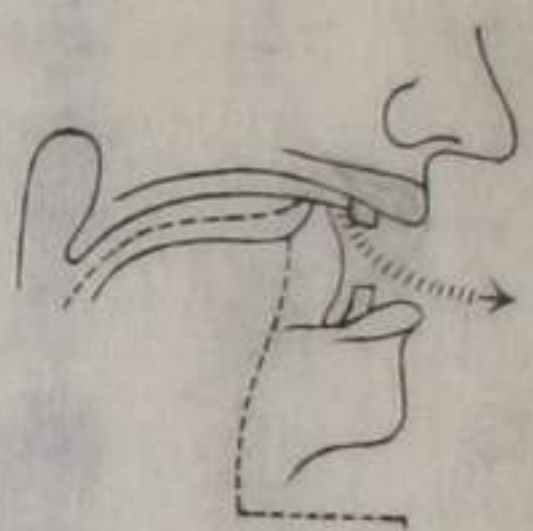


お行ノい音ト
 加音トヲ合セ
 發ス、下唇ヲ
 スポクシテ息氣
 ヲフレシム



お行ノ^ウ字ヲ象ドル
 口角ヲ側ヘヒキ下唇ヲスポクシテ
 お行ノい音ト^ウ音トヲ合セテ
 發スル意味ヲ表ス
 お行ノ一字ヲ象ドル

又其の^トハ、舌を卷きて、息氣を舌尖に觸れ、めて
 る音を發せ、息氣運營と相須つ舌の作用を表して、
 象どれるなり。尚左の圖を見て、會得をべし。



舌ヲマキテ息氣
ヲ舌尖ニラレシム



フル聲ノヒキヲ表ス
舌ヲマキテ息氣ヲ舌尖
ニラレシムル意味ヲ象ドル
舌基

又其のの^ヤハ其の音質、ア行の^ウ音を二つ合もせて、
象づくりたるものなるを以て、下唇を上門齒^ウに向け、
窄くして、息氣を下唇^ウを受けて、乃^ナリ音を發する息氣
運營と相須つ下唇の作用を表して、象どれるなり。尚
左の圖を見て、會得をばし。



ア行ノ^ウ音ヲ表
合^ウ下唇ヲ上門齒
ニ向ケスホクレテ息
氣ヲ下唇ニウク



ア行ノ^ウ字ヲニツカサネ
合^ウセタル意味ヲ象ドル

第二章 綴字法及變調符號

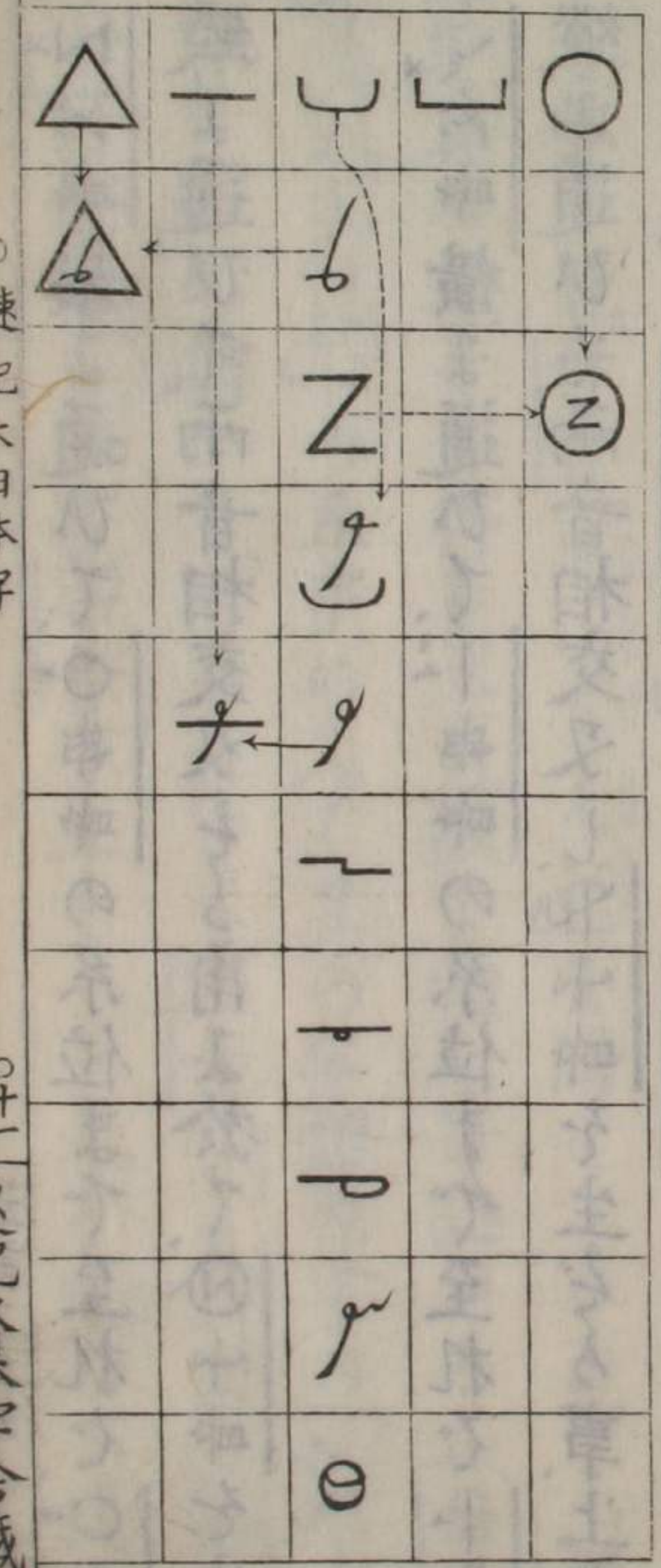
此の速記大日本字も、上^ウに説示せる如く五つの母字
の畫と九つの父字の線點との十四字をもて、文字の
本原とを。而^ウして之を千言萬語に應用せんよも、綴字
法をもて、種々の音に配當するのを知るべし。但此
の綴字法も、最規律正しきものよも、かの羅馬字の綴
字法の如く一系位中、他の系位の音の字此彼入^ウ交り

て列を爲す。如き錯雜なるもの、類ひは非ざる。悉皆一系位純音にて正しく反切法は準則せり。扱反切法とも、二音を約めて、一音を呼びなを法よて、五十音圖の第一列目の「あ」「い」「え」「お」の五音を母音よて、第三行目の「く」をつねふむゆるぐの九音を父音と知るべし。但母音を横よ列をなして、縦よ通ひ、父音を縦よ行をなして、横よ通ふ性ならぬのと、先豫記臆をるを要す。

扱其の父母兩音通ひて、相交又する角、若くは通ひて行合ふ末は於て、子音を分生するをもて定則とす。

例む左の圖式の如く、△は横よ通ひて、▽は縦よ通ひて、至れを△申は縦よ通ひて、兩音相交又する角は於て、△申を生ざるが如し。

父母十四字をりて反切法は據り、子字を妊孕して、五十音字は満たると綴字法の圖式



速記大日本字

又 \mathcal{N}_x \mathcal{H} 横は通ひて、 \circ \mathcal{H} \mathcal{H} の系位まで至れむ、 \circ \mathcal{H} \mathcal{H} 縦は通ひて、兩音相交又する角は於て、 \mathcal{N} \mathcal{H} \mathcal{H} を生む。

又 \mathcal{Y}_x \mathcal{H} 横は通ひて、 \mathcal{H} \mathcal{H} の系位まで至れむ、 \mathcal{H} \mathcal{H} 縦は通ひて、兩音相交又し、 \mathcal{Y} \mathcal{H} \mathcal{H} を生むる事上の例は同じ。

又 \mathcal{Y}_x \mathcal{H} 座かごらふ、 \mathcal{H} \mathcal{H} の系位は待てむ、 \mathcal{H} \mathcal{H} 縦は通ひ来て、 \mathcal{Y} \mathcal{H} \mathcal{H} と行合ひて、 \mathcal{Y} \mathcal{H} \mathcal{H} を生ずるも亦同し理より、自餘皆此の妙用は準則より、子音を生むるものなり。

扱又右の反切法は據り成立てらるる如く本邦の聲音を「あいうえお」の母音を除くの外、悉皆母音は孑られたる子音なれむ、都て母音の韻を帯びざるも、無し。其の證徴を、「かーア」「きーイ」「くーヶ」「けーエ」「こーオ」「きーア」「しーイ」「せーエ」「そーオ」とやうは長聲は呼びなむと、きた、都て皆母音「あいうえお」は歸せざるを、なきをもて、其の理を會得をべし。故は物を筆記をらふ、母音「あいうえお」の五字のみを、其の字體原字の「△」「○」の儘にて、用ふれども、父音「く」をつぬふむの「る」の九字も、畢竟子音を生むべき胤と成るは過ぎ

ざるものなれど、其の字跡、原字の「ア」「イ」「ウ」「エ」「オ」の儘にして、用をなせぬものとす。其の理由、尚如何となれど、「あいうえお」の母音のみを、純然たる喉音として、其の息氣の運営、専ら口の開合のみよ止まりて、毫も舌唇の作用を要せざれむなり。さるるを「く」とつぬふむゆるぐの「父音」も、其の息氣の運営、舌唇の作用のみよ止まらざりて、必ず母音を發すべき口の貌を要するをもて、「申」を組合せざるを得ざらなり。

即ち「ア」「イ」「ウ」「エ」「オ」と書くが如し。

但母音の「ア」を組合せたる上を、即ち「子字」と知るべし。

又自餘の子音たる「カ」「キ」「ク」「サ」「セ」「シ」「チ」「ニ」「ネ」「ヌ」「ハ」「ヒ」「フ」「マ」「メ」「ム」「ヤ」「イ」「エ」「ヨ」「ラ」「リ」「ル」「ワ」「ヰ」「ヱ」の三十六音も、即ち「ア」「イ」「ウ」「エ」「オ」の例に準じて、其の孕まれたる母音の字を其の音の字に必組合せせて、緩りなるを定則とす。

例を「ア」「イ」「ウ」「エ」「オ」を、即ち「カ」「キ」「ク」「サ」「セ」「シ」「チ」「ニ」「ネ」「ヌ」を、即ち「ハ」「ヒ」「フ」「マ」「メ」「ム」「ヤ」「イ」「エ」「ヨ」「ラ」「リ」「ル」「ワ」「ヰ」「ヱ」

〇 反切法は因て、約まりたる音なるをもて、其の
 字跡を、必母字の「△」「▽」「〇」と父字の「
 N」「M」「L」「K」と組合せざるを得
 ざるを、是自然の妙用として、証ふべからざるの
 理勢なり。自餘皆、左の圖は據り、之は準へて知る
 べし。

速記大日本字

五十音字の圖



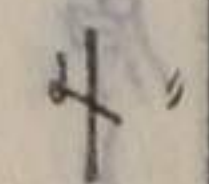
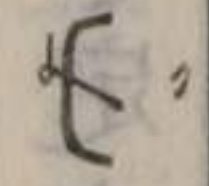
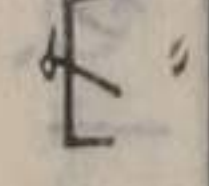
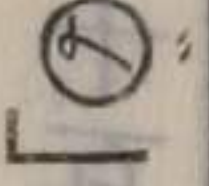
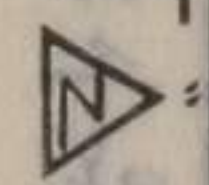
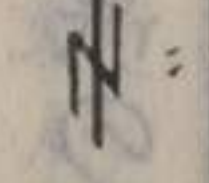
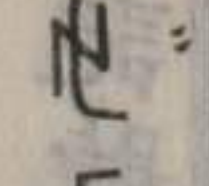
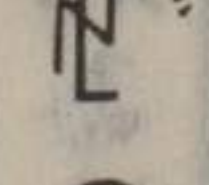
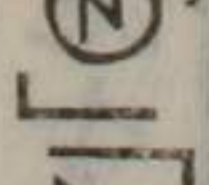
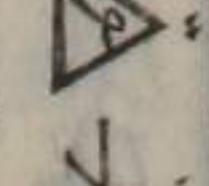
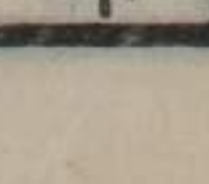
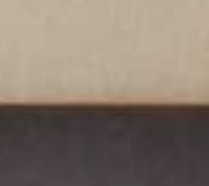

△	—	∪	└	○
△	≠	∪	└	○
△	≠	∪	└	○
△	≠	∪	└	○
△	≠	∪	└	○
△	≠	∪	└	○
△	≠	∪	└	○
△	≠	∪	└	○
△	≠	∪	└	○
△	≠	∪	└	○

扱我ら大日本帝國の音を、右の五十音字の圖の如く、
 音數五十に定まりて、も有れど、種々の變音有り。


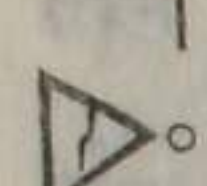
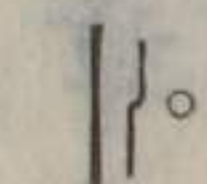
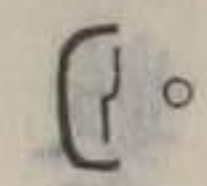
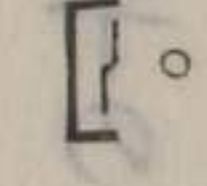
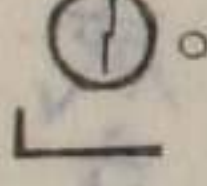


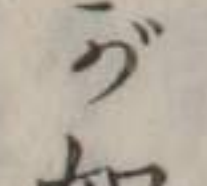
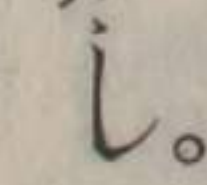
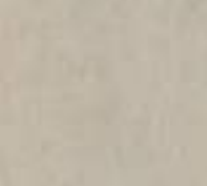
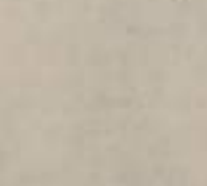

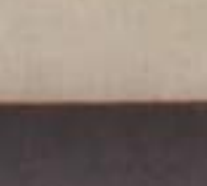

即濁音、次清音、急促音、撥鼻音の四種是なり。
 蓋此の變音たるや、畢竟本音の五十音中、二三の音の

變調は過ぎざるものかれで、別は字體を要するの理無し。たゞ本音の字體は其の變調の象を表したる點を施してもて、辨別するのみ。此らの點を變調符號と謂ふ。是亦羅馬字よりも、至便至利なるのみならず、本邦の音質は適切なる固より同日の論は非ざるなり。但此の點の如きも、從來のものをもて襲用せり。

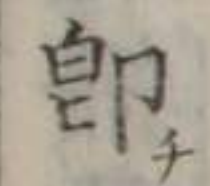


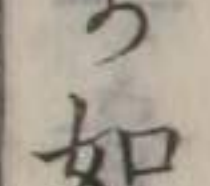
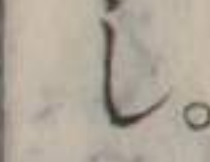


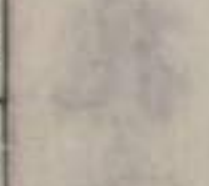
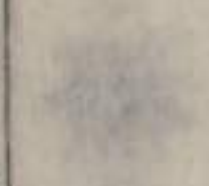
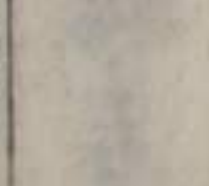
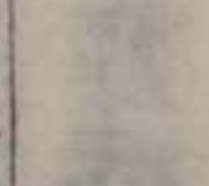
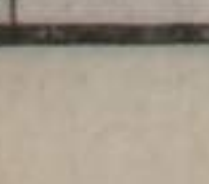


例を濁音がぎぐげご「ざじむぜぞ」だぢづでど「ばびぶべぼ」の二十音も、其の音を二つ疊重ねて震動るユ如き意味なるをもて、其の象を表して、本音の字首は、點を施せり。

即ち「              

又次清音「はひふへほ」の五音も、其の音を唇の間へ抑へて、急は放ち弾く意味なるをもて、其の象を表して、本音の字首は、點を施せり。

即ち「              

又急促音「つ」の一音も、其の音を舌背と口蓋との間へ抑へ、急は壓縮して弾く意味なるをもて、其の象を表して、つフ父音の原字の首は、點を施せり。

即ち「              

又撥鼻音「ん」の一音を、ぬ音を鼻孔へ撥ぬる意味なるをもて、其の象を表して、ぬ父音の原字の首を撥ねたり。

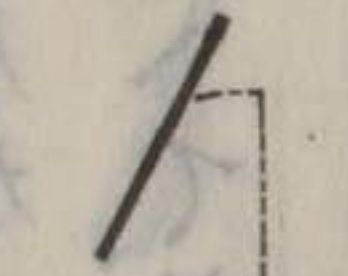
即ち「ん」と書くが如し。

第三章 數字の成立及用法

數字も物を算ふるは、「一」「二」「三」「四」とやうに指を屈伸するに代用をべき記號は過ぎざるものなれど、其の左手の指を折屈むる順序は、基き先、拇指を屈めたる貌を表し、斜線を引ききてもて、數一つの記號とを、之を萬數の本原と定め、一十百千萬の記號は汎く用ひ

なせり。但し十以上を、〇を加へて、數位を辨せり。又線を斜に書きなせらるる、たゞ運筆の序のみならず、左手の拇指を屈めたる貌を表し象とれるなり。

即ち「一」と書くが如し。尚左の圖を見て、會得をべし。



左手ノ拇指ヲ
屈メタルカタチ
ヲ象ドル

次に示指を拇指の外側へ屈加へたる貌を表し、斜線の左に小線を一つ加へて、數二つの記號とを、
即ち「二」と書くが如し。尚左の圖を見て、會得をべし。



拇指
示指ヲ拇指ノ外側ニ
屈メクハヘタルカタチヲ
象ドル

次は中指を尚^ホ拇指の外側は屈^ム加へたる貌を表し、斜線の左は小線を更^ヘ一つ加へて、数三つの記號とを。即^チ「^ニ」と書くが如し。尚^ホ左の圖を見て、會得をばし。



拇指
中指ヲ更ニ拇指ノ外
側ニ屈メクハヘタルカタ
チヲ象ドル

次は拇指を中間は挟みて、其の内側は尚^ホ環指を屈^ム加

へ、既^ニは屈めたりし外側の二指も、混然たる一物と歸したる象を表し、上鉤斜線の右は小線を一つ加へて、数四つの記號とを。即^チ「^ニ」と書くが如し。尚^ホ左の圖を見て、會得をばし

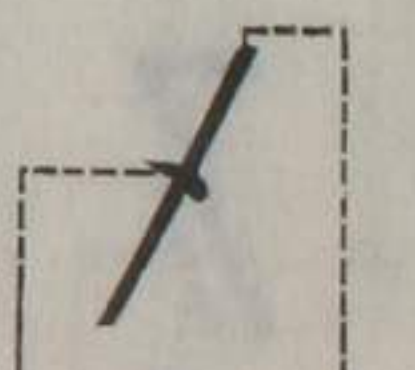


環指ヲ更ニ拇指ノ内
側ニ屈メクハヘタルカタ
チヲ象ドル

次は拇指を中間は挟み小指を尚^ホ其の拇指の内側は屈^ム加へ、内外二指づ、振分けは屈^ム竟へたるをもて、拇指を除く他の四指も、混然たる一物と歸したる象

を表し、拇指の斜線の中央より、点一つを加へて、数五の記號とす。

即チ「ㄨ」と書くが如し。尚左の圖を見て、會得をべし。



拇指ヲ象ドル
屈メテハリタル四指一物ニ
歸シタルヲ象ドル

次より小指を拇指の内側より起伸せしむる貌を表し、小線一つを有點斜線の右より加へて、数六の記號とす。
即チ「ㄨ」と書くが如し。尚左の圖を見て、會得をべし。



小指ヲ拇指ノ内側ニ
起コシテハリタルヲ象
ドル

次より環指を更より拇指の内側より起伸せしむる貌を表し、尚小線一つを有點斜線の右より加へて、数七の記號とす。

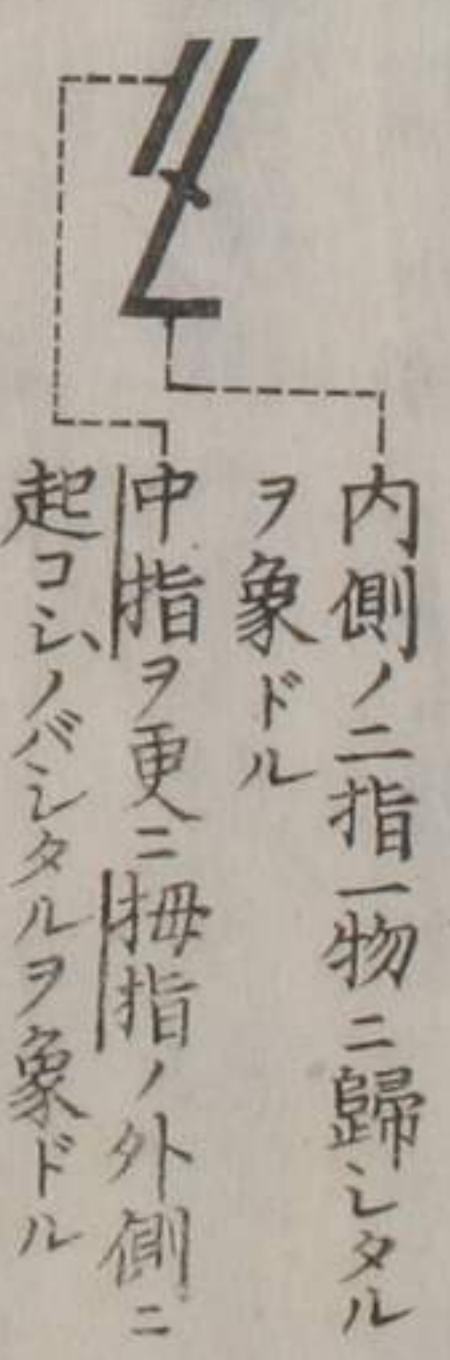
即チ「ㄨ」と書くが如し。尚左の圖を見て、會得をべし。



環指ヲ更ニ拇指ノ
内側ニ起コシテハリ
タルヲ象ドル

次は中指を更は拇指の外側より起伸むし、既に内側より起伸むしたりし二指を混然たる一物と歸したる象を表し、小線一つを下鉤有斜線の左より加へて、數八つの記號とす。

即ち「ㄨ」と書くが如し。尚左の圖を見て、會得をばし。



次は示指を更は拇指の外側より起伸むしたる象を表し、尚小線一つを下鉤有斜線の左より加へて、數九つの記號とす。

の記號とす。

即ち「ㄨ」と書くが如し。尚左の圖を見て、會得をばし。



環指より更は中指の外側より起伸むるは、バシタルヲ象ドル

此の數字の用法は、即ち横より書きなすべく、筆算に應用するさまは西洋の數字より異なる事無し。

速記大日本字
一 十 二十 三十 四十 五十 六十 七十 八十 九十 百 百一 百二 百三 百四 百五 百六 百七 百八 百九 百十 千 千一 千二 千三 千四 千五 千六 千七 千八 千九 千十 万 万一 万二 万三 万四 万五 万六 万七 万八 万九 万十 十万 十万一 十万二 十万三 十万四 十万五 十万六 十万七 十万八 十万九 十万十 百万 百万一 百万二 百万三 百万四 百万五 百万六 百万七 百万八 百万九 百万十 千万 千万一 千万二 千万三 千万四 千万五 千万六 千万七 千万八 千万九 千万十 億 億一 億二 億三 億四 億五 億六 億七 億八 億九 億十

第四章 書躰及運筆法

此の速記大日本字を五十音字數字共に眞書躰草書躰の二様は書別かてり。然れども書籍の印刷どもは物として眞書躰を用ふべしと雖ども此の速記大日本字を元來速記をもて所長とせらる處なれど平素筆記の上は用ひなを書躰を運筆の速力に恣なる續書きの草書躰をもて應用せらるを便利とせ。

五十音字なるを、

即ち「ア」イ「エ」ウ「オ」カ「キ」ク「ケ」コ「サ」シ「ス」セ「ソ」タ「チ」ツ「テ」ト「ナ」ニ「ネ」ヌ「ノ」ハ「ヒ」フ「ヘ」ホ「マ」ミ「メ」ム「ヤ」ユ「ヨ」

又數字なるを、
即ち「一」二「三」四「五」六「七」八「九」十「〇」

「あづま」と筆記せんは先其の母字を續書き

運筆法も其の語の母字を先續書きは横は書連ね次は筆を返して其の父字の線點を其の母字の畫内に加へいるをもて法とせ。

例を「あづま」と筆記せんは先其の母字を續書き

「*aa*」と書き、次は其の父字の線點を「*aa*」とやうよ、其の母字の畫内よ加へ、いろくが如し。

又「*aa*」と書くかおななく先「*aa*」と書き筆を返して「*aa*」とやうよ書きとの「*aa*」と書かんよ「*aa*」と記したるのちよ「*aa*」とやうよ書きとの「*aa*」と書かんよ先「*aa*」と書きあつて「*aa*」とやうよ書きとのろくが如し。

第五章 漢語綴字法

漢語も、本邦語と固より音質を異よせらる、有れたる綴字法、從て異よせざるを得ず。

此の綴字法を會得せんよ、豫先拗音標字と尾音符號とを暗記せむ、有るべからむ。

拗音標字と、謂ゆる漢語の拗音よて、「*き*」「*き*」

「*し*」「*し*」「*ち*」「*ち*」「*に*」「*に*」「*ひ*」「*ひ*」「*み*」「*み*」「*り*」「*り*」「*く*」「*く*」「*ぎ*」「*ぎ*」「*じ*」「*じ*」「*ぢ*」「*ぢ*」「*び*」「*び*」「*ぐ*」「*ぐ*」とやうよ呼びなむ、如き二十九音なるが、其の音も、母字の組合せを要せむ、父音の

原字の儘をもて、組立てたる一定の標字をもて、記
 標と名するものを謂ふ。但し、點を施せざる位置は因て、
 其の母字を代表せり。乃其の點上位なるも、△母字。
 下位なるも、○母字。右位なるも、一母字。左位なるも、
 「母字。又點の無きも、」母字と知るべし。

即ち「あ」「い」「う」「え」「お」
 「あ」「い」「う」「え」「お」
 「あ」「い」「う」「え」「お」
 「あ」「い」「う」「え」「お」

尾音符合とも、漢語の語尾音も、「いふんきくち
 つみ」の九音に定まりたるを、其の音の標字は基

づける種々の横線をもて符號とせざるものを謂ふ。
 但し一語一音は語尾の符號を要せざるものも、
 横線の左端は打滅しの斜線を施して、其の義を辨
 せり。

即ち「あ」「い」「う」「え」「お」
 「あ」「い」「う」「え」「お」
 「あ」「い」「う」「え」「お」
 「あ」「い」「う」「え」「お」
 「あ」「い」「う」「え」「お」

此の綴字法は、漢字一字の綴字も、其の首音の標
 字を先書き、次は尾音符號を其の下に記し、二字以上
 の熟語の綴字も、其の各首音の標字を先駢べて書
 き、次は各尾音符號を其の下に駢記を法とす、但し標

字も原字の儘を用ひて、母字の組合せを要せざる
こと上の例は同じ。

例だ
オ礼性功ヲ用業ヲ獵論權益敵策
ニルニルルルルルルルルルルル

職質ハテ説列ノ類半記理海内ノ内外射裁開被
ゾゾゾゾゾゾゾゾゾゾゾゾゾゾゾゾ
再興ヲ弊習ヲ大業ヲ會與ト對面ト大敵ヲ改曆キ外國
之ハニニニニニニニニニニニニニニニニ
オカヨ祭イモ大結キ開設廢絶海水平會社令旨
之ハニニニニニニニニニニニニニニニニ

利窓 謝罪 基礎 地租 交際 容膝 創業 講談 皇族
ルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルル
陋習 集會 編集 論說 適切 國粹 德望 着目 得失
ルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルル
滑稽 罰則 吐立 活發 筆記 達意 疎忽 理屈 一類
ルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルル
説明 關典 類族 水平 追討 同類
ルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルル
が如し。

第六章 指示辭、結尾辭、接續辭及感辭の標

字

指示辭結尾辭接續辭及感辭と共よ名詞動詞及形容
 詞副詞接續詞として性質を異よせるものなれど標字
 も亦從て異よせざるを得ず。且つ又一つよる綴字上字
 面相混同して意味の紛擾せんことをふせぐためな
 り。但母字の組合せを要せざる事上の例も同じ。

指示辭なるを

即チ
 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

是なり。

結尾辭なるを

即チ
 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

とやうに書く是なり。

接續辭なるを、

即チ

とやうに書く是なり。

感辭なるを、

即チ

よ書く是なり。

扱指示辭結尾辭接續辭及感辭と共よ、名詞動詞及形

容詞副詞接續詞の語尾よ副なりて、其の用を辨せり
りのなれむ、此の辭の類の字も、直よ其の語尾よ着け
て、綴りなきざるを得ざるなり。且又此の辭の類も、意
趣を喚起し、或も語脈の斷續を示すものなるをりて、
一字づゝ離して、綴りなきざるべうらだ。

例む

野	ノ	日	ハ	汗	ア	エ	ナ	袂	シ	ボ	レ	ル
野	ノ	日	ハ	汗	ア	エ	ナ	袂	シ	ボ	レ	ル
ナ	ニ	ナ	ニ	ナ	ニ	ナ	ニ	ナ	ニ	ナ	ニ	ナ
ナ	ニ	ナ	ニ	ナ	ニ	ナ	ニ	ナ	ニ	ナ	ニ	ナ
ナ	ニ	ナ	ニ	ナ	ニ	ナ	ニ	ナ	ニ	ナ	ニ	ナ
ナ	ニ	ナ	ニ	ナ	ニ	ナ	ニ	ナ	ニ	ナ	ニ	ナ

「とやうに書くが如し。」

第七章 速記大日本字と羅馬字との比較

并に縦書きと横書きとの辨

此の速記大日本字も、固より横書きの文字なるを
もて、運筆の速力、自然の眞理よかなひたれむ、從來の

假名よりも、筆記をるゝ時間を費やさず、疲勞を覺え
ざる事、實驗上人の能く知る處たり。文字も、都て縦書
きよりも横書きの方、遙か優れるの理由も、筆を
持つゝ拇指の力、多きを要するゝ導かるゝのみなら
ず、手臂の運用、左より右へ運ぶも、自然の妙用として、
誣ふべからざるの天性とを。尚又讀む上より論究せ
ん、人の眼も、横も長く裂けて、視界最縦よりも横も
廣く、且眼球の運用、上下より不便より、左右より便利な
れむ、自然書を読むは視力勞れむ、精神も亦從て倦ま
ざるの道理なり。されむ横書きの文字をもて、世よ

文明の文字と稱せらるる、動くまどき説なり。故に漢字及從來の假名の如きも、優勝劣敗なる世の進化に打任かせて、措きて問をぞ。今歐米諸國は勢力を恣にせしる羅馬字と此の速記大日本字との綴字法及字跡の優劣を比較せん爲に左に五十音圖と二三の綴字例文とを掲示し、公明の鑒識を天下に仰ぶざるを得ざるなり。

速記大日本字と羅馬字との比較圖

オ	o
コ	ko
ソ	so
ト	to
ノ	no
ホ	ho
モ	mo
ヨ	yo
ロ	ro
ワ	wo

羅馬字清音

	ア	イ	ウ	エ
→	a	i	u	e
↓	カ	キ	ク	ケ
	ka	ki	ku	ke
	サ	シ	ス	セ
	sa	shi	su	se
	タ	チ	ツ	テ
	ta	chi	tsu	te
	ナ	ニ	ヌ	ネ
	na	ni	nu	ne
	ハ	ヒ	フ	ヘ
	ha	hi	fu	he
	マ	ミ	ム	メ
	ma	mi	mu	me
	ヤ	イ	ユ	エ
	ya	i	yu	ye
	ラ	リ	ル	レ
	ra	ri	ru	re
	ワ	キ	ウ	エ
	wa	wi	wu	we

○速記大日本字

○廿七

速記大日本字

速大日本濁次音 記日字音清					→ 羅字濁 馬濁	
ガ	キ	ク	ケ	コ	ガ	ギ
ga	gi	ku	ke	ko	ga	gi
ザ	ジ	ズ	ゼ	ゾ	ザ	ジ
za	ji	zu	ze	zo	za	ji
ダ	ヂ	ヅ	デ	ド	ダ	ヂ
da	ji	zu	de	do	da	ji
バ	ビ	ブ	ベ	ボ	バ	ビ
ba	bi	bu	be	bo	ba	bi
パ	ピ	プ	ペ	ポ	pa	pi
pa	pi	pu	pe	po	pa	pi

音清 次音			速大日本清 記日字音			
グ	ゲ	ゴ	ア	イ	ウ	エ
gu	ge	go	a	i	u	e
ズ	ゼ	ゾ	カ	キ	ク	ケ
zu	ze	zo	ka	ki	ku	ke
ヅ	デ	ド	サ	シ	ス	セ
zu	de	do	sa	shi	su	se
ブ	ベ	ボ	タ	チ	ツ	テ
bu	be	bo	ta	chi	tsu	te
プ	ペ	ポ	ナ	ニ	ヌ	ネ
pu	pe	po	na	ni	nu	ne
			ハ	ヒ	フ	ヘ
			ha	hi	fu	he
			マ	ミ	ム	メ
			ma	mi	mu	me
			ヤ	イ	ユ	エ
			ya	i	yu	e
			ラ	リ	ル	レ
			ra	ri	ru	re
			ワ	ヰ	ヱ	ヱ
			wa	wa	wa	wa

音及拗本大速
例長音字日記

ギョ	グワ	グエ	キヤ	キユ	キヨ	クワ	クエ
gyo	gwa	gwe	kyā	kyū	kyō	kwā	kwē
ジヨ			シヤ	シユ	シヨ		
jo			shyā	shyū	shyō		
ヂヨ			チヤ	チユ	チヨ		
jo			chyā	chyū	chyō		
ビヨ			ニヤ	ニユ	ニヨ		
byo			nyā	nyū	nyō		
ピヨ			ヒヤ	ヒユ	ヒヨ		
pyo			hyā	hyū	hyō		
			ミヤ	ミユ	ミヨ		
			myā	myū	myō		
			リヤ	リユ	リヨ		
			ryā	ryū	ryō		
			ア	イ	ウ	エ	オ
			a	i	u	e	o
			カ	キ	ク	ケ	コ
			ka	ki	ku	ke	ko

同上

○速記大日本字

○廿九
速記大日本字

例長音及拗字羅馬

キヤ	キユ	キヨ	クワ	クエ
kyā	kyū	kyō	kwā	kwē
シヤ	シユ	シヨ		
shā	shū	shō		
チヤ	チユ	チヨ		
chā	chū	chō		
ニヤ	ニユ	ニヨ		
nyā	nyū	nyō		
ヒヤ	ヒユ	ヒヨ		
hyā	hyū	hyō		
ミヤ	ミユ	ミヨ		
myā	myū	myō		
リヤ	リユ	リヨ		
ryā	ryū	ryō		
ア	イ	ウ	エ	オ
a	i	u	e	o
カ	キ	ク	ケ	コ
kā	kī	kū	kē	kō

自餘
同例
なる
を
る
て
畧
も。

速記大日本字

次音濁音
清音の馬

清音濁音
次音の物

ギヤ	ギユ	ギョ	グワ	ゲエ	ギヤ	ギユ
					gya	gyu
ビヤ	ビユ	ビョ			ジャ	ジュ
					ja	ju
ヂヤ	ヂユ	ヂョ			ヂヤ	ヂユ
					ja	ju
ピヤ	ピユ	ピョ			ビヤ	ビユ
					bya	byu
					ピヤ	ピユ
					pya	pyu

速記大日本字と羅馬字との綴字例文比較

字馬羅

ガ	ク	セ	ン	ヲ	ベン
キ	ヤ	ウ	シ	テ	ミ
キ	ヤ	ウ	シ	テ	ミ
キ	ヤ	ウ	シ	テ	ミ
ナ	カ	レ			
キ	ヨ	ク	ロ	ト	ヘ
ニ	シ	テ	ロ	ロ	ザ

字本日大記速

虚懐	平心ニシテ	志
シ	ヲ	バ
高上ニコソ	特ツ	

通言大正全痛片

hi ut ba kauthya ハケル

u ni koto motau be

keere.

kototo ut koumei

心 ヲ 公明正大ニ置

seidai ni ohi te

キラ 其 規模ヲ ヒロ

sono kito ut hio

ソレ ノ 道理ノ 本原ヲ

kushi dauji no jon

探 リ テ ハ カ ル ベ シ 学 問 ノ 進 歩

gen no saguri te e

ハ カ ル ベ シ

gakumon no shin

ho no hataru be

shi.

tsune ni kurui

常 ニ 光陰ヲ 惜シ

○速記大日本字

○世一 新刊大正全痛片

<p>シ マ ノ ヨ シ ミ テ</p> <p>イ タ ヅ ラ</p> <p>イ タ ヅ タ ミ ト</p> <p>キ ロ マ ス グ ス</p> <p>ウ カ シ</p> <p>ナ カ セ</p>	<p>ラ 速 ニ 月 日 ヲ</p> <p>イ タ ヅ タ ミ ト</p> <p>イ タ ヅ タ ミ ト</p> <p>イ タ ヅ タ ミ ト</p> <p>イ タ ヅ タ ミ ト</p> <p>イ タ ヅ タ ミ ト</p>
---	---

第八章 加點畧字躰の綴字法及運筆法の

例文

前章と比較せらる如く、羅馬字も速記大日本字よりも

筆記したる上の字面の冗長なる殆ど一と二との比
 例をなして、迂遠なるのみならず、字數を要する上、
 至りても、尚^ホ二倍は下^ダらざらべし。されむ、此の速記大
 日本字も、運筆の速力も、亦從て共に比準すべきを以
 て、時を減じ、勞を省くのみならず、紙面を費やさざる事
 も、亦其の優劣、天淵月鼈の相違なる、固より言を待た
 ざして、明確に知られたり。然りと雖^レども、官省商社な
 どよ於て、多端繁忙の間、急劇捷記を要すべき、帳簿
 手扣へどもの筆記も、尚^ホ一層速力を倍する簡易至
 便の加點畧字躰を用ふべし。其の綴字法も、父字の上

下右端よ、點を施して、母字の組合せよ代表し、子字を綴りたるを志かたりて、乃其の點上位なるを、お母字。下位なるを、い母字。右上なるを、え母字。右下なるを、の字躰左よ揭示せらるる如し。

加點略字躰綴字法五十音字の圖

イ	ウ	エ	オ
—	—	—	—
キ	ク	ケ	コ
—	—	—	—
シ	ス	セ	ソ
—	—	—	—
チ	ツ	テ	ト
—	—	—	—
ニ	ヌ	ネ	ノ
—	—	—	—
ヒ	フ	ヘ	ホ
—	—	—	—
ミ	ム	メ	モ
—	—	—	—
ヤ	ユ	エ	ヨ
—	—	—	—
リ	ル	レ	ロ
—	—	—	—
ヰ	ガ	エ	ヲ
e	e	e	e

扱此の綴字の運筆法も、其の言句中母字と父字との原字を先續けがきよ綴りなし、次は筆を返して、母字の代表點を子字の系位に應じて、施を法とす。但、同母音重なれるときも、其の末音の一字よのみ母字の代表點を施して、自餘も畧をべし。且此の點も、數子字の母音を兼ねたるをもて、其の意味を表し、左へ撥ねて、施をべし。又其の始音より母音の代表無點の子字位をるときも、其の界目よ小縦線を施して、其の別を辨をべし。

ア	カ	サ	タ	ナ	ハ	マ	ヤ	ラ	ハ
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

例む、「マ カ シ ハ ト レ ニ キ コ」
などやうに書くが如し。

且つ「ハ」も綴字上他の字と相混同して、區別し難き場合あり。然るときも、其の界目は同く小縦線を施すべし。

例む「マ カ シ ハ ト レ ニ キ コ」などやうに書くが如し。

左は加點畧字躰綴字法を揭示し、運筆の一斑を窺知らしむ。

加點畧字躰綴字法の運筆例文

始 ハ 學 マ 問 ト 好 シ
彼 ハ 能 ク 勉 ム 強 ク ヤ
ナ 陰 マ 惜 ム ベシ

月 日 ハ 人 ヲ 待 タ ス

光 陰 ハ 吾 ガ 産 業

ナリ

國 益 ヲ 計 ル ベシ

優 レル ハ 勝 チ 劣 レ

ハ 八 負 ヲ

弱 *

者 *

肉 ハ

強

者 *

食 ト 物

第九 章 略 點 走 筆 躰 綴 字 法 及 運 筆 例 文

前 章 示 揭 示 せ ざる 加 點 略 字 躰 綴 字 法 是 平 素 の 筆 記 用 び かな ざる 至 して 簡 易 輕 便 なり と 雖 ども 教 場 筆 記 傍 聽 筆 記 と ち ち 更 尚 速 力 を 倍 せ ざる 極 速 最 敏 な

○速記大日本字

○卅五(東)巳(長)字(与)或(反)

る畧點走筆躰を用ふべし。綴字の字躰左に揭示せらるる如し。

略點走筆躰綴字法五十音字の圖

ア	イ	ウ	エ	オ
カ	キ	ク	ケ	コ
サ	シ	ス	セ	ソ
タ	チ	ツ	テ	ト
ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ
ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ
マ	ミ	ム	メ	モ
ヤ	イ	ユ	エ	ヨ
ラ	リ	ル	レ	ロ
ワ	ヰ	ヱ	ヰ	ヱ

扱又此の綴字の運筆法も右の五十音字を基礎として、母字代表點の方位に字尾を聊屈曲せしめて加點

に代ふる綴り方にて筆を返し其の點を加ふるの手数と注目との勞を省き時を減ぐべきに依り此の綴字法の右に出づるの他は有る事なし。此の字躰を運筆速力の極點とす。此に實地應用をべき法則講習の順序とも如き、別は著作せる速記大學生教場筆記法速記大學生教場に懇切明確に説示せり。今本書も聊綴字例文の一二を揭示して運筆の端緒を窺はらしむ。

畧點走筆躰綴字例文

忍^ニ 耐^タ ハ 諸^ホ 咎^ノ 快^ク 樂^ク

、 本^ホ 精^{セイ}

、 能^ノ ク 心^{ココロ} ヲ 用^{ヨウ} フ レ バ 勝^{カチ}

前^{マエ} 通^{ツウ} 常^{ジョウ} ノ 事^{コト} 輕^{ケイ} 且^カ

ナ 善^{ゼン} キ 經^{ケイ} 驗^{ケン} ト ナ ル

、 師^シ ナリ

艱^{カン} 難^{ナン} 辛^{シン} 苦^ク ハ 己^{コト} ガ

師^シ ナリ

吾^ガ ニ 敵^{テキ} スル 者^{モノ} 少^シ 部^ブ

ヲ 輔^ボ ヲ ヲル ナリ

成^ナ ル ト 成^ナ ラザル ハ 勤^{チン} ヲム

ル ト 勤^シメザルニヨル
 賢^シ 替^ハ 才^ハ 陰^ヲ 熾^ム
 入^レ ハ 世^ニ 實^シ 益^ヲ ナ
 ナハルベカラズ
 .

一 林 甕 臣 新 發明 速記大日本字 終り。

明治二十年八月九日版權免許
 全 年九月 出版

定價金三十錢

東京府平民

林 甕 臣

東京神田區西小川町三丁目十番地

著者兼 出版人

發兌元

速記大日本字會假事務所
 右同所

